

に

「による」と「の」 不易のねらい 忘るまじ

Keyword : Education through Art, Education for Art. 人づくり



他者の筆蹟を壊さないようにと気をつけながら描き進める小屋浦保育所の子どもたちの姿を美しく感じました。

「による (through)」と「の (for)」というのは「美術による教育 (Education through Art)」と「美術の教育 (Education for Art)」の2つの大きな柱を示しています。どちらが欠けてもそれは適正な美術教育にはなりません。

誤解をおそれず乱暴粗雑な言い方をするなら、「による (through)」は人としての適正な生き方・あり方を身につけさせる文脈であり、「の (for)」は人間が営々築きあげてきた文化としての美術の伝承や技術・技能を獲得させる文脈です。

これらの文脈を背景に、「紫陽花 (共同制作/坂町立小屋浦保育所)」や「自画像入りお当番表」はとりわけ意味のある題材だと思います。子どもたちがドローイング・ペインティングを楽しみ、紫陽花や自画像 (心象表現) が生まれ、紫陽花は保育所の中にあって圧倒的な存在感を持ったオブジェとなりました。また、自画像 (坂町立坂保育所) の取り組みは「お当番表 (目的表現)」に発展し役割意識の形成が期待されます。無理なく「による」と「の」を具備した題材と私は受け止めました。

ところで、「美術による教育」のこと。私は“表現と鑑賞通し 人つくる”と詠んでいます。たとえば「鑑賞」の活動では意見交流等から自分とは違う他者の価値観や考え方を知りあらためて自分のことを理解するなど人間理解の深化が期待されます。あるいはポスターづくり等から環境、人権、平和への思いや願いが深まることも期待されます。美術教育が作品づくりをのみ目指すものではなく「みる・かく・つくる (手)」

活動を通して (through) 「感じ (Heart)」, 「考え (Head)」る力が磨かれることが想定できるのです。なお、これらのことは「表現及び鑑賞の活動を通して…」で起こされる我が国の「幼稚園教育要領」及び「学習指導要領」の教科等の目標に通底する理念であり私が言うまでもなく明記されているのです。とはいえこの文脈に関する合意形成は未だ不十分と言うのが私の所見です。

「美術の教育」については“自分流 みる・かく・つくるを 遊ぶこと”と詠み、この文脈を子どもたちに伝えることこそ「要」と私は考えております。しかし、これも残念ながら不十分と言わざるを得ません。誰のための美術なのか、なんのための美術なのかなどに関する教師等の認識が十分ではないのです。

「学習指導要領」にも問題があります。感性、情操、みる・かく・つくる力を形成すれば十全の美術教育なのでしょう。そんなレベルで美術教育が学校に在るのでしょうか。誤解を呼ぶ「目標」の文言は、やはり気がかりです。



坂保育所では子どもたちの美術活動が日常生活に活かされていました。きっとセンスのある人になると思います。